

ダーとしての立場で)ジェンダー研究者を標榜している私だ—大阪大学の大学院にも学んだ—が、それでも周囲を見渡すと、同じような興味関心の仲間はどうしても「女性」が多い。

学生が研究テーマに何を選ぶかという場面においても「男の子向け・女の子向け」があるというのも典型的な「ジェンダー」規範であり、まことに困ったことなのだが、殊にこの男子学生は研究テーマとして「ジェンダー」が選びにくい、すなわち男性は性別にかかわる世界構造に疑問を持つてはいけなかつたかのごとき風潮は、はたしていかなものなのだろうか!? これでは男たるものは、いつまでたつても男らしさの呪縛から降りることとはできないことになってしまう。

の進展にもたらした成果は否定できないものの、確固として存在し動かせない身体的性別「セックス」に對置するものとしての「ジェンダー」には、昨今の私は疑義を抱いている。

先般、冥王星が惑星ではないことになったが、これは昨夜まで丸かつた冥王星が、今朝起きたら三角や四角になっていたからなどではない。単に天文学会が惑星の定義を変更したために、認定基準から外れてしまっただけなのだ。ということは、身体的性別の基準もまた、ある日突然学会の話し合いで変わってしまったとしても不思議ではない。

しよせん天文学も生物学も、人間の文化の一領域なのだから、なんのことはない、身体的性別「セックス」もまた、「ジェンダー」のひとつの要素にすぎないわけだ。

となると、わざわざ「ジェンダー」の語を使う意味も薄らいでくる。少なくとも日本語においては、単に「性別」と表現するほうが、説明の手間や誤解される危険を避けるメリットも高い。

私たちはそろそろ、次の段階に進むためにも、高らかに宣言すべき時期に来ているのかもしれない。——「さよならジェンダー」と。

さよならジェンダー

ところで「ジェンダー」概念が生まれた歴史的背景やフェミニズム

第14回

セクスの本棚

フェミックスブックレット —女子大生のための性教育とエンパワーメント— 「ジェンダー論」の教え方ガイド

沼崎 一郎 著

女子大でジェンダー論を教えて6年になる著者が、大学の教室で行われるマスプロ授業をとおして試みた試行錯誤の記録が、2003年10月から2年間にわたり「暮らしと教育をつなぐWe」(フェミックス)に連載されたが、それに加筆の上一冊にまとめられたのが本書である。

授業に飽きさせないため、数値を用いたタイムリーな話題、インパクトを与えるビデオ上映や写真の投影、意識テストなどを活用し、学生たちの興味を引きつけながら展開された15回の授業内容が詳細に紹介されている。奥歯にももの挟まった言いかた

でなく、ズバツと刺激的な授業内容である。学生たちには世間や恋人に騙されず、自分を大切にできるようにしてほしいと願い、目覚まし時計を演じている著者。「『かけがえない』のは自分の身体と心、男など『かけかえ』はいくらでもある。自分を大切にしなさい。決して言いなりになるでない」・・・性被害者予備軍である女子学生たちへのくり返しくり返しのメッセージ。学生たちの反応も感想文やアンケートとして毎回の授業の結果が記載されている。

内容が大変濃い本書であるが、読みやすく自ら授業を受けているようによく理解でき、学生たちの状況も読み取れる。機会があれば著者の講義をぜひ受けてみたい。

我が家には同世代の息子が二人、彼らの気づきを促すためにもこの本を何とか読ませてみたいと思う。

立花 初美